

| | | | |
|----|---------------------|--------------|---------|
| 所属 | 心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程 | 修了年度 | 2020 年度 |
| 氏名 | 伊敷 望 | 指導教員 (主査) | 浅野 憲一 |

| | |
|------|--|
| 論文題目 | 過敏型自己愛傾向がセルフ・コンパッションを介して精神的健康に及ぼす影響 |
|------|--|

本文概要

【問題と目的】自己愛は古くから多くの研究者によって注目され(遠田, 2010), ひきこもり, 摂食障害, スチューデント・アパシーなどの背景に自己愛の問題があると指摘されている(磯部, 2003; 生地, 2000)。自己愛は精神分析的立場からパーソナリティ障害の1つとして提唱されたものであったが(神野, 2018), 現在では, パーソナリティ特性としての自己愛傾向が注目されるようになってきている(岡田, 2009)。近年の自己愛傾向に関する研究では, 自己愛を2つの側面から捉えるものが多く, Gabbard (1994, 舘監訳 1997)によると, 自己愛傾向には, 周囲を気かけず, 傷つけられることに鈍感な「誇大型」と, 抑制的で他者からの評価に敏感であり, 傷つきやすい「過敏型」の2つの側面がある。中山・中谷(2006)は, 2種類の自己愛傾向と精神的健康の関連について検討を行った結果, 誇大型自己愛傾向は精神的な不健康と関連が見られないが, 過敏型自己愛傾向は精神的な不健康と正の関連があることを明らかにしている。また, 精神的健康を促進するものとして, セルフ・コンパッション (self-compassion) が注目されている (Neff, 2003a, 2003b)。セルフ・コンパッションとは, Neff (2003a) が仏教哲学に基づいて提唱した概念であり, 自分自身の苦しみを避けずにありのまま受け入れ, 自分自身に対して思いやりを向け, 苦しみを和らげようとする態度である。過敏型自己愛傾向は精神的健康を阻害することが明らかになっているが(中山・中谷, 2006; 中山・小塩, 2007), 過敏型自己愛傾向とセルフ・コンパッションおよび精神的健康の関連について取り上げた研究はいまだにない。そのため, 本研究では, 過敏型自己愛傾向がセルフ・コンパッションを介して精神的健康に及ぼすという仮説モデルの検討を行うことを目的とする。

【方法】大学生 241 名 (男性 93 名, 女性 148 名, 平均年齢 19.87 歳, $SD=1.22$) を対象に質問紙調査を実施した。調査内容は①フェイスシート (年齢, 性別), ②自己愛的脆弱性尺度短縮版 (上地・宮下, 2009), ③セルフ・コンパッション尺度日本語版 (有光, 2014), ④日本語 DASS-15 (安達・上野, 2011)

【結果と考察】過敏型自己愛傾向がセルフ・コンパッションを介して精神的健康に及ぼすという仮説モデルの検証を行うために, 過敏型自己愛傾向の因子ごとに (「自己顕示抑制」, 「自己緩和不全」, 「潜在的特権意識」, 「承認・賞賛過敏性」) 合計 4 つのモデルを作成し, 共分散構造分析を行った。過敏型自己愛傾向の中で「自己顕示抑制」, 「自己緩和不全」, 「承認・賞賛過敏性」は直接的に精神的健康を阻害する過程とセルフ・コンパッションを低めて間接的に精神的健康を阻害する過程が確認された。このため, 過敏型自己愛傾向そのものが精神的健康に影響を及ぼすだけでなく, 過敏型自己愛傾向が高い人はセルフ・コンパッションが低いいため, 抑うつや不安, ストレスを感じやすく, 精神的健康を低下させやすいということが明らかになった。このことから, セルフ・コンパッションを高める介入をすることは, 過敏型自己愛傾向が高い者に対して抑うつ, 不安, ストレスを軽減するための手段として活用できる可能性があると考えられる。また, 「潜在的特権意識」は「自己顕示抑制」, 「自己緩和不全」, 「承認・賞賛過敏性」とは異なり, セルフ・コンパッションを媒介せずに, 抑うつ, 不安, ストレスを高めていた。このことから, 過敏型自己愛傾向の下位側面ごとにセルフ・コンパッションに及ぼす影響が異なり, セルフ・コンパッションを低める側面とセルフ・コンパッションとの間に関連が見られない側面があることが示唆された。